

## 2. 学童期／思春期

### この時期のてんかんの特徴

この時期に発症した一部のてんかんでは、成長とともに治る、すなわち治療が不要になる場合があります。一方で、そうでない場合も多いため診断や特定の原因の有無について調べるのが大切です。思春期以降の発症の場合は、大人になっても治療が必要になることを考えるべきかもしれません。この場合は、将来的な副作用の少ないお薬を選ぶことが大事でしょう。

てんかんのタイプによっては、発作症状だけでなく認知機能、この年齢であれば特に学習などに影響が見られることがあります。また、てんかんのある子ども達は発達障害を伴う場合もあり、勉強や学校生活において支援が必要な場面も出てくるかもしれません。気になる症状があれば主治医に相談して検査してもらいましょう。その上で必要なら学校の先生と関わり方などについて相談してみるとよいでしょう。



## 就学をどう決めるか

治療薬を服用中でも症状、とくにてんかん発作が落ち着いていれば普通に学校生活が送れます。

一方で、対応を要するてんかん発作が頻回であったり、身体、あるいは知的な障害のため学校生活に対して個別に支援が必要であったりする場合は特別支援学校や特別支援学級への進学を検討することもあります。就学先、進学先を決めるのに悩んだり、不安があったりする際には、教育委員会、希望する学校に相談してください。

入学先が決まったら、主治医に相談の上、実際に通う学校と病気のこと、必要な配慮といったことを具体的に話し合います。その際には、発作の時の症状を伝え、もし学校で発作が出た場合の対処法について事前に学級担任や保健室の先生と協議しておきます。発作の症状や程度はお子さんによって異なるので、対処方法もそれぞれちがいます。一般的には、「発作への対応(P23)」で示した通りですが、お子さんの症状に合わせて、たとえば、「発作が出てすぐ回復するので様子を見てよい」、「発作後に具合が悪くなるので保健室でしばらく休んだ方がよい」、「親御さんに連絡して迎えに来てもらう」など具体的にルールを決めておいた方が安心ですし、学校としても対応がしやすいかもしれません。



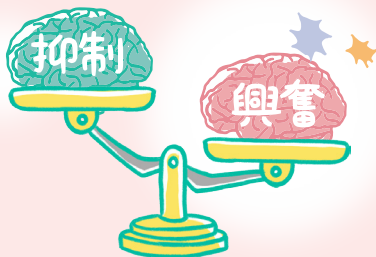
## てんかんは治るの？

残念ながらてんかんを根本的に治すお薬はまだ発明されていません。治療薬である抗てんかん薬とは、脳の過剰な興奮を抑えて「てんかん発作が出ないように予防する」お薬です。ですから飲み忘れてたり勝手に中止したりすると、それまで薬で抑えていた発作がまた起きてしまいます。

しかし、一部のてんかんには「治る」てんかんがあります。発症したときは脳が未熟なために神経興奮による発作が起こりやすいが、一定の年齢になって脳が成熟すれば、このような発作は自然とおこらなくなるというものです。つまりお薬をのまなくても発作が出なくなるてんかんということになります。この場合は、発症から発作が自然になくなるまでの期間のみ治療を受けることがあります。

一方「治らない」てんかんでは、成長して大人になっても脳の興奮性が自然と落ち着くことはありません。ですから、発作が起きないようにするためにはずっとお薬を飲み続ける必要があります。

いつの日かすべてのてんかんそのものを治してくれるお薬が開発されることを期待します。



てんかんは、

**脳の「興奮」と「抑制」のバランス**

が崩れたときに起こる。

## メモ.14

## テレビやゲームとてんかん

10年以上前の話ですが、テレビアニメの放送中に子どもたちの一部がけいれん発作を起こしたことがありました。これは光過敏性てんかんというてんかんの症状で、映像の中に含まれる強い刺激の光や点滅により、てんかん発作が誘発されたためにおきました。てんかんのある人の一部で見られる症状で、子どもの方で頻度が高いとされますが、大人でも見られます。脳波検査の際に光刺激による反応を調べますが、そこで異常があった場合も注意が必要かもしれません。テレビアニメに限らずテレビゲームで発作が誘発された事例もあり、極度の刺激であれば、どんな光や視覚的な刺激によっても発作が誘発される可能性があります。「テレビを見るときは部屋を明るくしテレビから離れてみてください」という表示を普段目にすることも多いと思います。先述の事件以降、テレビ放映やゲーム等における映像や光の点滅には十分に注意が払われるようになり、普通に視聴する分にはほとんど問題はないでしょう。だからと言って、一日に何時間もテレビやゲームにはまってしまうと、規則正しい生活リズムへの影響や目の疲れにつながりますので、気をつけた方がよいでしょう。

